

以降に延びるものと豫想せらるゝに至り、日本軍は愁眉を開いた。^{五三}真に沖繩作戦に於ける我が將兵の敢闘の賜であつた。斯くて九州方面の作戦準備は漸く見透しがついた。大本營は切迫する戦況に鑑み、

六月二十三日帝都の防衛を強化せんが為、東京防衛軍を新設し、これを才十二方面軍司令官の隷下に入れた。これを以て本土防衛地上兵力の配備概況は挿図の通りとなつた。

本土防衛總兵力 一九四五年二月に豫定された四〇箇師団動員(除朝鮮北東)は之を以て実現した。二箇師団と二箇混成旅団が本州、四國、九州に於て計畫以外に動員された。終戦時に於けるその配備は要図才の如く進展して居た。然しながら爆撃その他に依る生産低下に因り(兵器は五一六〇%に低下)、九州以外の地区の才二、才三次

兵団の装備は遅延し其の完備は一九四六年春頃になるものと豫想された。又陣地構築に忙殺せられて訓練に手が廻らぬ有様であつた。

その動員兵力は陸海軍合し約二四〇万（内四〇万は特警その他の特別召集）に上り、尙後述する如く以上の野戦軍の外、地上兵力の不足を捕足し国民抗戦を指導する為、国民義勇戦闘隊の編成が実施或は企畫せられた。

本土方面に於ける陸、海軍指揮組織は挿表の如く整備せられ又本州、四国、九州及近邊島嶼の終戦頃に於ける作戦可能總兵力は（筆者註、北東、朝鮮方面は後述する）

一、地上兵力一五二箇師団、二二箇旅団、三警備旅団、二箇戦車師団、

七箇戦車旅団、四箇高射砲師団

二航空戦刀一約一〇、〇〇〇機（内約七五％は練習機改修の特攻機）
五五

三海上特攻戦刀一約三三〇〇隻

四その他の決戦用

海上戦刀一 駆逐艦十九隻

潜水艦三八隻

五陸軍関係の軍人軍属の總數は約二二五万

六海軍関係の軍人軍属の總數は約一〇五万

七特設警備隊の兵量數は約二五万

八國民義勇戦闘隊の要員は二八〇〇万

筆者註一三三四七八は後述す。